
マシンハート

鋼野タケシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マシンハート

【Nコード】

N5249K

【作者名】

鋼野タケシ

【あらすじ】

　　齢八十を迎えた狂気の科学者、アーサー・オールドリッジ。彼はただ一人で自らの研究施設に引きこもり、世間との関係を断った。自らの死期が近いことを悟った彼が始めた、最後の研究。それは『機械に心を持たせること』だった。

アーサー・オルドリッジの名を知らないとしても、その功績を知らない者は存在しないだろう。

二十三世紀以降、遅々として発展の見られなくなったロボット工学界に突如降り立った天才。それがアーサー・オルドリッジだ。

アーサーが人類の進歩にもたらした恩恵は、数え上げればきりがない。今では当然となったスペースネットワーク・コンピュータの生みの親もアーサーだ。著書『ロボットの権利と義務』の序文は小学校の教科書にも載っている。

アーサーの研究成果として最も有名なものは、『心を持つ人間型ロボット』の開発だろう。それぞれ異なる人格を持ち、教育により成長し、人間と同じように活動するロボットの誕生。

旧時代までは人間の道具、ペットの代わりでしかなかったロボットが、人間と共に生活を営む。SFの世界でしかなかった、人間とロボットの共存する時代は、この時に始まったのだ。

周知のとおり、かつてはロボット技術基本法にて、人と同じ外見のロボット作成は禁じられていた。だが、アーサーの熱意は法律さえ改正させた。いや、心を持つ人間型ロボットが完成していた以上、法律は改正せざるを得なかった、と言うべきだろうか。

富と名声を欲しいままにしたアーサー・オルドリッジであったが、アーサー自身は莫大な金にも人々の賞賛にも無関心だった。ただひたすら研究に没頭し、次々と新しいものを生み出す。世間の人々はアーサーを『マッドサイエンティスト』と呼んだ。人類の進歩に多大な貢献を果たした人物ではあるが、尊敬よりも奇異の目で見られることが多かったという。

いったいアーサー・オルドリッジとはどのような人物だったのだろうか？ 数々の逸話が残っているが、その真相を知る者は実に少ない。

齡八十を迎えた狂気の科学者、アーサー・オルドリッジ。彼はただ一人自らの研究施設に引きこもり、世間との関係を断った。

自らの死期が近いことを悟った彼が始めた、最後の研究。それは『機械に心を持たせること』だった。

現代の技術では、人間のマネゴトをする無機質なロボットが限界だ。二十一世紀に流行った電子ペットのように、多芸ではあるがプログラムされた行動しか取れない。

自ら考え、感情を持ち、バイオリズムがあり、周囲の刺激により自ら成長する、人間と同じ領域に立つロボット。それが彼の理想とする、究極の人間型ロボット、心を持つロボットだった。

「さあ、目を覚ましなさい、私の愛しい娘」

施術台に横たわる裸体の少女。人工筋肉と機生皮膚により、外見を人間そっくりに作り上げた彼のロボット。

二十一世紀の技術革命以降、多くの企業が人間型ロボットの開発に着手した。だが、ロボットの外見と言動が人に近付けば近付くほど、世間の反感と人権屋たちの反発を招いた。人間型ロボットを道具として扱う風潮が、青少年に悪影響を与え、健全な人格の育成を妨げるというのだ。批判の声は無視できないほどに大きくなり、ついには二千二百四年、ロボット技術基本法により、人の外見をしたロボットの作成は禁止された。

だが所詮、そんなものは人の作った法律に過ぎない。アーサーを突き動かす狂気めいた探究心の前には、人間のルールなど無意味だ。機械の少女がパチリと目を覚ます。少女は寝惚けた様子もなく、澄んだ瞳がアーサーを捕らえる。

「おはよう、シャルロット」

アーサーは娘を抱き締めると、その額にキスをした。

彼女のモデルとなっているのは、もう何十年も昔、事故に巻き込

まれて死んだ彼の娘。シャルロット・メイスン。どれだけ科学が進歩しようとも、死んだ人間を生き返らせることは出来ない。

だからアーサーは、ロボットとして娘を蘇らせた。

「おはようございます、お父様」

シャルロットの声は人間の肉声と変わらない。だが、どこか感情を抑制されたような、無機質な響きがあった。

彼女はエメラルドブルーの視覚センサでアーサーを見つめる。状況に応じた会話のやり取りはインプットされていない。現代のロボットであれば、あらかじめ無数の会話パターンを持ち、相手を喜ばせるような様々な会話が出る。今の彼女にはそれが出来ない。出来ないことを自ら学習するのが、心を持ったロボットの役割なのだ。「シャルロット。お前は生まれ変わったんだよ。お前は今、機械の身体を持っている。これからたくさん勉強して、本物の心を持つんだ。そうすればお前は、もう一度人間として生きることが出来る」

まだシャルロットは心を持っていない。ロボットとして生まれたシャルロットが成長し、人間の心を持つことが出来れば、彼の研究は完成だと言える。

学会の人間はアーサーの実力を認めていない。彼は狂った科学者と呼ばれ、若い頃にロボット工学会を追放された。それ以来、一人黙々と研究を重ねて来た。

彼の追い求める理想は遥か遠くにある。それを考えれば、凡人の評価が何になるというのだ？ 機械に心を持たせること。その理想さえ実現出来れば、思い残すことなくこの世界を去れる。

アーサー・オールドリッジの生涯を掛けた、最後の研究が始まった。

アーサーはまず、シャルロットに文字の読み書きを教えた。英語、フランス語、ラテン語、日本語、ヘブライ語。彼女は一度に複数の言語を同時に取得し、教えられたことは決して忘れなかった。人間であれば天才の部類に入る頭脳だが、ロボットのメモリには人間を遥かに凌駕する記憶領域がある。これは通常のロボットと何も変わ

らない。

彼女に人間性を与えるため、次にアーサーは芸術や精神面での『教育』を施した。詩作に文学、哲学書に自己啓発書を読ませる。絵画を見せ、彼女自身に描かせて、音楽を演奏し、様々な名曲を鑑賞させる。プログラムされたロボットには決して出来ない、人間のみが行える精神活動を、彼女に求めたのだ。

娘の教育とデータに基づく研究、計画の調整。全てを遂行するのにアーサーだけでは手が足らず、彼は自身が作り上げたサポートロボットたちを、娘の家庭教師として利用した。

シャルロットは段々と人間らしさを見せるようになった。優れた音楽に耳を傾け、美しい絵画に魅入り、花や動物を愛で始める。だが、まだその挙動はロボットに近い。教えられたことが出来るようになるだけでは、人間とは呼べない。インプットさせられた行動を繰り返す、そんなものはロボットだ。

「シャルロット、お前は人間になるんだ」

どれだけ忙しくても、アーサーは毎晩、娘と語り合うのを忘れなかった。

「はい、お父様」

「今はまだ、お前はロボットだ。だけど、少しずつ成長している。プログラムされた心ではない、本物の心、感情と魂を手に入れば、人間になれるんだよ。わかるね？」

無機質なエメラルドブルーの瞳を、アーサーはじっと見つめた。

「はい、お父様」

彼女はアーサーの言葉には決して逆らわず、進んで勉強を始めた。哲学書を読みふけり、創造的な活動を続ける。

半年も過ぎた頃、シャルロットはアーサーの前で笑顔を見せるようになった。研究は順調に進んでいる。彼はそう信じていた。

ある夜、アーサーは研究の疲れからか、ワイングラスを床に落としてしまう。

カシャン、と小さな音を立てて、アンティークのグラスは砕けた。

物音を聞きつけ、サポートロボットが部屋に入り込んでくる。ドラム缶のような胴体に小型キャタピラを搭載した、掃除用サポートロボットだ。

「マスター、お怪我はありませんか」

機械音声がアーサーに語りかける。立ちくらみがした。根を詰めすぎているのはわかつているが、残された時間はそう多くないのだ。「片付けておいてくれ」

アーサーが命令すると、了解の証に、青色の視覚センサが一瞬きらめいた。命令に反抗することなく、ロボットはテキパキと働く。グラス片はすべて回収され、絨毯の染みはすかさず漂白される。わずかな時間で仕事を終えると、サポートロボットは屋敷内の掃除に戻った。

入れ違いになるように、シャルロットがアーサーの研究室を訪れた。

「何かありましたか、お父様」

「いや……なんでもない。シャルロット、今日はもう寝なさい」

「はい、お父様」

命令に疑問を挟むことすらせず、シャルロットはすぐに研究室を後にした。了解の言葉を発した瞬間、彼女のエメラルドブルーの瞳が、一瞬だけきらめくのが見えた。

どれだけ人間に近付けようと、彼女の挙動はロボットのものだ。

アーサーは頭を振った。そんなことはわかつている。だからこそ、より人間らしさを求めているのだ。

翌朝、サポートロボットの呼び出し音が枕元で響いた。

時計を見ると、まだ朝の十時半。普段、昼過ぎまで眠るアーサーにとっては早すぎる時間帯だ。

「……なんだ、こんな朝早くに」

「マスター。来客でございます」

「この屋敷には誰も近寄らせるなと命令してあるはずだ。追い返せ」

「マスター。例外設定のお客様でございます」

チツ、と舌打ちをすると、アーサーは身を起こした。世間の全てと関係を断っているアーサーが、例外と認めている人間は一人しかない。

家主の許可も得ず、彼女はリビングでくつろいでいた。湯気の立つ紅茶をすすり、立体ビジョンのニュース番組を見ている。

「久しぶりね、アーサー。顔色悪いわよ？　ちゃんと食事採ってる？」

プラチナブロンドの長髪に、活力に溢れたエメラルドグリーンの瞳。白い肌は若々しく、まだ二十台とも言え張れる外見をしている。

「ああ、どうだかな。キミの方は元気そうだ」

「そうね……そうかも」

「それで、今日は何の用があつて来たんだ」

「あら、ずいぶん冷たい言い草ね？　元々夫婦だったじゃない。用がなくなつて、会いたくなる時もあるわよ」

彼女の名はルイーズ・アンジェリカ・メイスン。シャルロットの母親で、アーサーの別れた妻だ。年齢は忘れてしまったが、アーサーとそう大差ないはずだ。

「キミはそういう女じゃない。それくらいはわかつているさ」

ルイーズはニコリと笑う。今でもルイーズは出会った頃と変わらない美しさを保っている。

最新の美容手術を行えば、彼女のように年齢を五十以上も誤魔化せる。女優を続けるルイーズに取って、外見の美醜は大切なものだろう。だが、人生の道程が刻んだ精神の疲労は、どれだけ外面を取り繕おうと隠し切れない。彼女の顔には、昔は見られなかったいくつかの皺が見える。彼女もアーサーと同じく、年を取っているのだ。「アナタって変わらないわね。そういうところも……もうすぐ、あの子の命日でしょ。アナタ、言わなきゃお墓に花も持ってこないじゃない？」

「墓なんてものはシンボルに過ぎない。それを祭るのは愚かな感傷

だ」

「悪いことかしら。抛り所があるから、人の心は癒されるのよ。あの子はあそこで眠っている。私が会いに行くのを待っている。そう考えるのは自然なことじゃない？」

「キミと議論を交わすつもりはない。元々考え方が相容れないから、別れたのではなかったかね」

「どうだったかしら。少なくとも、私はその違いを受け入れられるほどに、アナタを愛していたわよ」

ふう、とルイーズが溜息を吐く。何も変わらない。悲しい時に微笑むそのクセも、出会った頃のあのままだ。

「まだ私を恨んでいる？ シャルロットを守れなかったこと」

「キミを恨むのは筋違いだ。彼女の死は事故だった……たとえ私がそばにいても、彼女は救えなかっただろう」

二人が離婚した際、シャルロットの親権はルイーズが持つことになった。研究に没頭し、家族を省みない父親と一緒に暮らしたのでは、シャルロットも不幸になる。そう話し合った末での結論だ。そのことについて、アーサーはルイーズを恨んだりしていない。

あるのはただ、後悔だけだ。

「おはよう、お父様」

寝巻き姿のまま、台所にシャルロットが姿を見せる。

ルイーズの手からティーカップが落ち、床にぶつかって割れた。ガシャン、と小さな音を立てて、陶器のカップは床に散らばった。

「ああ……神様。これはいったいどういうことですか」

彼女は声を震わせて、シャルロットに近付く。蒼白な顔で、シャルロットの頬に触れた。

シャルロットの青い瞳が、ルイーズを捉える。ルイーズは何度も首を振り、溜息を漏らしている。

「お怪我はありませんか？」

抑揚のない声で、シャルロットがルイーズに尋ねる。アーサーの背筋に冷たいものが走った。それはまるでサポートロボットと変わ

りない、機械のような声だった。

「シャルロット。部屋に戻りなさい」

「はい、お父様」

命令されれば、決して反抗しない。彼女は速やかに指示に従い、一度も振り返らずに台所を後にする。

ルイズは瞳に涙を浮かべ、恐怖の眼差しでアーサーを見た。

「まさか、アーサー、アナタなんてことを……あの子は、ロボットなのね」

「そうだ。この世界で唯一の、人間と同じように考え、同じように生きるロボットだ」

ルイズは胸の前で十字を切ると、小さく神への祈りを呟いた。

「どれだけ外見を真似ようと、ロボットはロボットよ。それに、人間の外見をしたロボットは禁止されているわ。まさか、忘れたわけじゃないでしょう」

「法律など守っていても、人間の進歩は望めない。どれだけ医術が発展しようと、死んだ人間が生き返らないというなら……もう一度、この世に生を受けさせるだけだ」

「狂っているわ」

涙を流しながら、ルイズは悲痛な声で言った。

アーサーは自嘲気味に笑った。

「そうでなければ、こんな世界で生きてはいられない」

ルイズはその後、決して屋敷に近付くことはなかった。アーサーから連絡を取ることは決してしない。研究の邪魔が入らないというなら、好都合だ。

「お父様、今日はお空が晴れていて、とっても気持ちが良いわ」

「ああ、そうだな」

シャルロットが生まれてから、彼女はとても進歩していた。多くの言葉を覚え、多彩な表情を見せるようになった。だがその多くは、アーサーが想定しているロボットとしての機能に他ならない。

「お父様、私、人間の心を持つことが出来るかしら？ そうしたら私、お父様のお仕事を手伝いたいです。ロボットも作れるようになります。もつとたくさんお勉強をして、お父様の研究を世間に認めさせるわ。いつか人間と同じようになれたら……」

「シャルロット」

彼は耐えられず、彼女のお喋りを中断させた。こちらの気を引こうと語り続けるその様子が、人間の心を癒す目的で作られたペット用ロボットにそっくりで、我慢ならなかった。

声音から表情まで、決して忘れたことのない娘のものを再現した。だからこそ、彼女が人間ではないと感じるたびに、心が疼いた。

「今日は家事を試みよう。サポートロボットたちの仕事を手伝うんだ」

「はい、お父様」

彼女の質問に答えもせず、命令を下す。それでもシャルロットは、当たり前のように従った。

アーサーは焦りを感じていた。何か重大な見落としをしているのかも知れない。彼の計算に間違いがなければ、彼女は人間と同じように成長するはずだった。何が足りないのだろう。何が悪いのだろう。

彼の天才的な頭脳を持っても、わからなかった。どれだけ人間に似せても、どれだけ人間に近付いても、シャルロットの言動はロボットのそれを抜けることは出来ない。彼がプログラムした通りに学習し、その通りにしか行動しない。自発的な行動を見せたとしても、『自発的に行動するように設定されたプログラム』が働いているからだ。

学んだ結果を忠実に再現する、完璧なロボット。人間に近付ければ近付けるほど、彼女がロボットだという認識がアーサーに生まれる。

ジレンマから脱出できず、彼は狂気の如き熱意を持って、彼は研究を続けた。最新の科学技術から、ホームクルスやゴーレムと言っ

たオカルトじみた研究にまで手を伸ばした。

だが、どれだけ研究を続けようと、答えは見つからない。シャルロットは人間を模したロボットに過ぎず、彼の傷跡は広がり続けた。更に数ヶ月が過ぎた。アーサーは研究レポートを書き連ねていると、突然むせかり、激しく咳き込んだ。身体をくの字に折り、荒い息を整える。体中に倦怠感が押し掛かり、しばらくは立ち上がれなかった。疲労だけが原因でないのは、自分が一番わかっていて。

何とかして、研究を完成させなければ。

彼はシャルロットの姿を探した。庭にある花畑に、彼女の姿はあった。土を耕すサポートロボットが、一定間隔ごとに土を掘り返している。まったく同じ間隔で、シャルロットは鍬で土を掘り返している。黙々と同じ動作を繰り返すそれは、ロボットそのものだった。「シャルロット」

彼女に近付き、咄嗟にアーサーは彼女の手首を掴んでいた。この暖かさは人間のぬくもりではない。コンピューターが発する機械熱だ。

「どうしました、お父様」

表情を変えず、彼女はエメラルドグリーンの瞳でアーサーを見た。娘と同じ姿をしたロボットが、娘と同じ言葉を発している。

ぐらり、と目の前が歪む。視界がぐるぐると回り、立ってられない。全ての音が遠ざかっていく。意識が暗闇に飲み込まれて、アーサーは土の上に倒れこんだ

終わりの時間が近い。すでにアーサー・オールドリッジは諦めていた。

どれだけ学習させたところで、シャルロットはロボットに過ぎない。プログラムされた動作、コンピューターの導き出す答え。人間を模したところで、所詮彼女も機械を超えられなかった。まるでサポートロボットと変わりはない。ロボットが人間の皮をかぶっただけ。

看護用サポートロボットとシャルロットが並び、アーサーのベッドの傍に立っていた。

絶望は憎しみと怒りに変わる。アーサーは二セモノの娘に向かい、辛辣な言葉を投げかけた。

「シャルロット。お前はロボットだ。人間には決してなれない。私の作ったプログラム。所詮機械に過ぎない」

突然、アーサーに怒りを向けられ、シャルロットは返答に窮しているように見える。

だが実際は、経験のない状況に、コンピューターが下すべき行動を決定できずに居るだけだ。

「お前が心を持つなんて有り得ない。その悲しみも喜びも、私が考えて与えたものだ。だから与えられた感情以外では反応が出来ない。どれだけ学習しようと、お前はロボットとしての精度を高めるだけだ。シャルロットのマガイモノめ。あの娘はもう私の手に届かない。遠くへ行ってしまったのだ……お前の存在そのものが彼女への冒涇だ」

「お父様、どうしてそんなことを言うのですか」

「ああ、ずいぶん悲しそうな顔をするじゃないか。その表情もプログラムだ。傷付けられたとコンピュータが認識すれば、人工筋肉が悲しい表情を作る。まったく馬鹿馬鹿しい。この私が、人生の最後にこんなガラクタしか作れないなんて。私はもうすぐ死ぬ。お前は私の生涯で最後の、最悪で最低の失敗作だ」

「お父様……」

「黙れ。機械に心を持たせようだなんて、本当に下手なことを考えたものだ。どこかへ行ってしまう。消えろ、私の前から。命令だ、二度と姿を見せるな」

黙れ、消えろ。そう命令されたシャルロットは、何も言わずに背を向けて彼の部屋を後にした。

ロボットは人間に逆らえない。アーサーがシャルロットに命令すれば、シャルロットは笑いながらも自分の体を破壊するだろう。

ロボットとはそういう物だ。人間に取って都合の良い道具、時には暇つぶしの玩具。あくまで人間の生活を楽にするためのツールに過ぎず、どれだけ人間に近付けて精巧に作ったところで、その本分を越えることは出来ない。

そんな物に愛しい娘の姿を模してしまうとは。自分の神経は孤独の中で予想以上にまいっていったようだ。ルーズに偉そうな口はきけない。感傷的なのは自分ではないか。

息が詰まり、激しく咳き込む。肺が痛む。息が苦しい。血管に針でも流し込まれたかのように、全身を苦痛が襲った。身体を折り曲げ、痛みの波が引くのを待つ。口から流れ出たのは、赤い血だった。病魔に肉体を蝕まれ、衰弱するように魂をすり減らしていった。間際に迫った死を感じながら、アーサーは目を閉じた。

「実にくだらない人生だ。閉塞されて腐りきった学界、無知蒙昧で進歩を求めない民衆たち。誰も私を理解し、認めようとはしなかった……唯一愛した女性是我的の下を去り、命よりも大切な娘は突然奪われた。こんなものが人生なら、生まれて来たのは間違いだった」

誰も居ない部屋の中、アーサーは世界への恨み言を呟いた。

彼は神を信じない。だが、もし死後の世界があるのだとすれば、もう一度娘に会うことが出来るだろうか。

目的地もなく、ただ命じられたままに、荒廃した大地をシャルロットは進んだ。

脳内のメモリーが、屋敷の近辺の地図を再生する。あと二日ほど歩き続ければ、人間の住む街に辿り着くことも出来る。だがその前に、シャルロットの体内に蓄えられたエネルギーが尽きるだろう。

彼女にとって、父の言葉は全てだった。機械の体に人間の心。そうすれば、ロボットであることを超えて人間になれる。だから彼女はたくさんのことを学んだ。父の蔵書を読み漁り、無数の知識を身に付けて、サポートロボットの活動を見て、人間が行うべき家事を学んだ。

彼女の心は『喜び』も『悲しみ』も覚えた。

だけど、今の状態を表す言葉はわからない。父の命令に従って動いている。黙れ、消えろ。そう命令された。だから何も言わず、彼の目の前から消えた。

父の命令に従うことは『喜び』だ。シャルロットが何かを学ぶたびに、父は優しい言葉を投げ掛けてくれる。だからシャルロットは決して彼の命令には逆らわなかった。何もかも父の言うとおりに、父の想定するとおりに行動した。そうすることが父を喜ばせ、自分の喜びにも繋がる。そう信じていた。

今もそうだ。父の命令に従っているのだから、感じるべき気持ちは『喜び』なのだ。彼女に搭載されたコンピュータはそう結論を出した。

だが、だとしたら今も探し続けている言葉は何だろう。

「お父様、どうしてお側にいられないのですか？」

彼女の呼び掛けに答える声はない。メモリーをいくら検索しても、答えは見つからない。

メモリーの中に一つの言葉が浮かんた。そう、コレは疑問だ。

どうして私はここにいるんだろう。消えろと命令された。どこかへ行ってしまえと命令された。

どこかって、どこ？

「お父様、もう私は必要ないのですか？」

答えはすぐに見つかった。父の言った言葉は一言一句違えずに再生出来る。間違いなく、父にとってシャルロットは必要な存在となつたのだ。それが結論で、他に導き出せる結論はない。

それならばなぜ、別の答えを探しているのだろうか。

立ち止まらなければいけない。両足に負荷が掛かりすぎている。

休息が必要だ。深刻な問題が発生する前に、休まなければ。

機械の心臓が熱を帯びている。人間で言う疲労だ。私は休まなければならぬ。そうしなければ、

どうなるって言うの？

止まってしまふ。活動が停止するということは、それはつまり、死だ。だから、

それが何？

父に不要と思われ、これ以上存在し続けることに何の意味があるのだろう。

気が付けばシャルロットは走り出していた。コンピュータの下す指示は休息。人間の身体が脳からの命令で動くように、コンピュータの命令で機械の身体は動く。ロボットが搭載したコンピュータの指示と逆の行動を取れるなんて、有り得ない。

彼女はただ走り続けた。視覚センサにダメージの計算がはじき出される。ファイルが破損し、システムが危険信号を鳴らし、エラーを吐き出す。自己修復機能が異常箇所の走査を始める。彼女はすべての命令を無視すると、何も考えずに父の元へ走った。

屋敷の門を潜り抜け、彼の寝室まで立ち止まらずに駆け抜ける。

「お父様！」

死に瀕するアーサーの手を握る。全身がオーバーヒートして、シャルロットの両手からは冷却水がにじみ出ている。人間で言うなら汗が吹き出している状態だ。彼女は荒い呼吸を繰り返し、肺機能が回復するのを待った。

蒼白な顔をしてベッドで横たわるアーサー・オールドリッジがゆっくりと目を開ける。

「シャルロット……！」

一瞬だけ、アーサーの顔は驚愕に見開かれた。それからすぐに、溜息を吐いて目を閉じる。

「……彼女は死んだ。どうして二セモノのお前がここにいる。私は命令を下したはずだ、ここからいなくなれと。お前が、戻るはずがない」

「お父様、私は自分の意思でここにいます」

「お前に意思などない……あると思い込んでいるだけだ。プログラムに過ぎない。お前はここに戻れないんだ。いったい誰が手を加え

た……」

「私の身体は機械です。でも私には心があります。人間と同じ、本物の心があるんです。だからお父様……」

だから私は失敗作じゃない。お父様にそう認めて欲しい。本物のシャルロットにはなれなくても、私は父の娘なのだから。

シャルロットは父の言葉を待った。乾いた唇が小さく動く。だがそれ以上、アーサーは何も言わなかった。

「お父様……？」

呼び掛けても、返事はない。アーサーは目を閉じたまま、何も言おうとはしない。

恐る恐る脈を計る。呼吸を確認する。何度も何度も生体反応を確認し、コンピュータが冷静に結論を下した。

アーサー・オルドリッジは息を引き取った。

シャルロットがそれを理解した途端、コンピュータが異常な働きをした。体内に残ったエネルギーが爆発するように、全身を駆け巡った。頭を内側から叩かれるような、経験のない痛み。

シャルロットは呆然としゃがみ込んだ。愛する人との死別。これは悲しみだ。視覚センサが震える。人間だったら泣けたのに。身体は機械だから、涙はこぼれない。

それなら、崩れそうな気持ちをどうやって吐き出せばいいんだろう。

シャルロットの嘆きに答える声はなく、彼女はただ唇を噛み締めた。

痛い、苦しい。大切な人がいなくなって、どうしようもない苦痛が全身を走り回っている。

「こんなものが人間の心なら、私は知りたくありませんでした」

アーサー・オルドリッジの名を知らないとしても、その功績を知

らない者は存在しないだろう。

富と名声を欲しいままにしたアーサー・オルドリッジであつたが、莫大な金にも人々の賞賛にも無関心だった。ただひたすら研究に没頭する。世間の人々はアーサーを『マッドサイエンティスト』と呼んだ。人類の進歩に多大な貢献を果たした人物ではあるが、尊敬よりも奇異の目で見られることが多かったという。

世界初の心を持つ女性型ロボット、アーサー・オルドリッジ。

自らロボットでありながら、ロボット工学界を牽引する数々の技術革命をもたらした彼女。その謎はあまりにも多い。

アーサーの外見は人間そのものだ。どこから見ても、十代の少女と姿は変わらない。にも関わらず、彼女は間違いなくロボットだった。今では当然の存在だが、当時、人間の外見をしたロボットというのは、かなりの衝撃を世間と学界にもたらした。

彼女は彗星の如く世間に現れると、人間と同じように働き、次々と新しい技術を世に押し出した。

「父に教わったことを広めたに過ぎません。私のオリジナルはひとつもないのです。父の研究成果を私が引き継ぎ、発表しているだけ」

ある雑誌のインタビューで、アーサーはそう語った。いったい誰が彼女を作り上げたのか？ 彼女は自らの出生の秘密を決して語らなかつたという。どのような情熱が彼女を突き動かしたのか？ 未だ議論の種が尽きることはないが、もはや我々にそれを知る術はない。いずれにせよ、我々ロボットが人間と平等に生きられているのは、アーサー・オルドリッジという開拓者が新しい時代を切り開いてくれたおかげである。

彼女は自らの機能が停止する直前、こう呟いたという話が残されている。

「私はただ、愛が欲しかった。父に認めて欲しかっただけ」

いったいアーサー・オルドリッジとはどのような人物だったのだろうか？ 数々の逸話が残っているが、その真相を知る者は実に少ない。

（後書き）

たくさんの方が書かれているモノだと思いますが、こういうテーマは好きです。

もつと単純に、ロボットだからマシンだから涙は流せないけどわかるぜ熱い友情！って話にしようと思ったんですけどね、気付いたらこつという話になってました。

結末はかなり悩んだんですけど、こついったカタチになりました。いくつもパターンが生まれても、ひとつしか採用できないのが悩みどころですね。

きつと何を選んでも満足はしないと思います。
だからまた似たようなテーマで別の書くかも知れせん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5249k/>

マシンハート

2010年10月8日15時22分発行